

## 熊谷明泰先生の笑顔

外国語学部長  
外国語教育学研究科長  
竹内 理

熊谷明泰先生は、1999年に文学部教授として関西大学へ着任され、20世紀最後の年に外国語教育研究機構（当時）へ移籍されました。2002年からは、大学院外国語教育学研究科発足とともに演習指導教員としてご活躍され、2009年には外国語学部創設にともない同学部教授となりました。その後、2016年には名誉教授の称号を授与され、今般、特別契約教授の期間も満了、無事、御退職の日を迎えられました。関大における朝鮮語・朝鮮文化研究の礎を築かれた先生の功績は多大なものがあるだけに、ご退職の日を迎えるにあたり、教員一同、強く寂寥の感を持たざるを得ません。

先生が、2007年に在外研究員として、中国北部にある延辺で朝鮮族の研究に従事された時のことです。ご存知のように、在外研究に行くためには事前に健康診断を受ける必要がありますが、先生はこれが大嫌いだったのです。しかし、大望の前には、小事は片付けねばなりません。一念発起（少し大袈裟かもしれませんが）されて受診されたその直後に、法文坂の途中で先生にお会いしました。この時、私に向かって「あれは嫌なものだね。」と一言、しみじみとおっしゃいました。こんな他愛のない会話は、たぶんご本人は覚えていらっしゃるかもしれませんが、その時の先生のお顔に、いたずらっ子のような笑みが浮かんでいたのが印象的でした。

次に同じ笑顔をされたのは、2011年に先生の長年の研究業績が高く評価されて、韓国の東崇学術財団（著名な朝鮮語学者、金敏洙博士が設立した財団で、「東崇」というのはかつてソウル大学があった場所の名前とのこと）から学術賞をお受けになられた時でした。お祝いの言葉をお伝えしたところ、少しはにかみながらも、あの笑顔を見せてくださいました。そして3度目は、名誉教授号の授与式でのこと。アカデミックガウンに身を包まれて、mortarboardを頭にかぶり、称号記を手にされたお姿を写真に撮らせて頂いたのですが、その時の笑顔が、また例のいたずらっ子のような笑みで、とても印象に残るものでした。

先生といえば、これまで教授会や学務委員会で、舌鋒鋭く攻め込まれるお姿を拝見する機会が多かったため、どちらかと言えば（いや、確実に）強面のイメージを持っておられる方が多

かったのではないのでしょうか。しかし、上記のような経験から、どうやらあれは先生の一面しか表していないのだ、と私は思うようになりました。そう思って先生のお言葉や行動を見ていくと、柔らかい面が結構多く観察できることに気づきました。強面のイメージのまままで御退職となられるのはあまりにも残念です。3月末の最後の教授会では、そのイメージを払拭するため、ぜひ満面の笑顔を私たちにお見せ頂き、先生の別の一面を知らしめていただければ、と思っています。

熊谷先生、長い間、ありがとうございました。どうか健康にだけは留意されて、これからも存分に研究を進めてください。そして、時々我々に笑顔を見せに来てくださいね。